

放課後八限目ラヂオ活動報告

中村晴香、栞山海、富澤沙季

はじめに

本稿は、2020年8月から、早稲田大学空間映像研究ゼミナールにて進行中の放課後八限目ラヂオプロジェクトの経緯、背景を整理し（図1）、その過程を記録することで、プロジェクトが持つ意義について考察するものである。なお、このプロジェクトは12月9日現在も、進行中である。

1. プロジェクトについて

1-1. プロジェクト概要

本プロジェクトはオンライン授業が長期化する中、〈誰でもが、いつでも参加できる場〉、〈パーソナルで他愛のないことを話せる場〉、〈授業とは異なる環境で、学生同士が繋がる場〉を作ることを目的としたポッドキャストプロジェクトだ。

上記の目的を具体化、共有するために以下が決定された。

1-2. プロジェクト詳細

番組タイトルは「放課後八限目ラヂオ」とした。“放課後”という各々がコロナ以前、他愛のない話をしていた場所を想起させる言葉と、学生にとって課外活動やサークル活動など、授業以外の活動を行っていた時間帯にあたる“八限目”という言葉を組み合わせて、放課後八限目ラヂオとした。

番組キャッチコピーは、「遠くからでも、近くでも、昼も、夜も放課後の時間を過ごせる場所です。本日も、授業終わりの教室で始まるような他愛ないお喋りをしながら、一緒

* 社会科学総合学院 佐藤洋一教授の指導の下に作成された。

に放課後を過ごしましょう。」である。毎回の番組の冒頭で流すことで、プロジェクト及び、番組のメッセージをリスナーに伝えることを目指した。

番組周知のためにはビジュアルイメージも必要と考え、番組ロゴを制作した。“放課後”という場所を表すモチーフに学校の校舎を、“八限目”という時間を表すモチーフに八限目(21時45分)を指す時計、月を用いた。イメージカラーは配信時刻である夜の雰囲気が伝わるよう、暗めの色を用いた。ロゴはレトロな書体を意識し制作した。

リスナーとのコミュニケーションにはお便りを用いた。テーマのあるお便りとリスナーが自由にテーマ設定できるふつうのお便り、“ふつおた”の2種類を毎週、インスタグラムのストーリー機能とメール、ハガキ、Google フォームで募集した。

番組テーマ曲として、エンディング曲“Broken Radio”とオリジナルジングルを制作した。「オールナイトニッポン」であれば、“Bitter Sweet Samba”といったように既存のラジオ番組はその番組を印象づけるジングルやテーマ曲がある。本番組も冒頭と終わりに毎回同じ曲を流すことで、各回の統一感の演出、番組の印象づけを狙った。楽曲制作は、空間映像研究ゼミナール2年生の山口穰之が行った。番組BGMはフリー素材の音源を使用した。

プロジェクト進行の詳細は図2を参照してほしい。

2. 放課後八限目ラヂオという場について

2-1. 自由に誰でも出入りでき、偶発的なコミュニケーションが発生する場は作れたか。

2-1-1. 番組参加から考えて

本プロジェクトは、オンライン上で誰もが、いつでも参加可能な場を作ることを目指していた。

番組は東京で収録、配信されたものを音声配信サイトを通じて、国内外問わずアクセスできた。Anchor から、国内外の15の国と地域で、昼夜を問わず聞かれていたことが確認できた。お便りも場所、時間を問わず書かれていることが、Google フォームの提出時間から確認された。リスナーの年齢層は幅広く、主なリスナーはパーソナリティと同年代である18~22歳だった。これらの情報から、番組に興味、関心を持つ人は、いつでも自由にアクセスできる場所であったと推測できる。

一方でインターネット上にあるコミュニティであるため、番組を知らない限りアクセスできないという問題があった。物理的な空間の場合、その存在を知らなかったとしても通りすがりに参加可能だ。しかしながらインターネット上のコミュニティの場合、参加者自らがそのコミュニティの情報を得て、能動的にアクセスする必要がある。

今回、このプロジェクトの主な対象は大学1年生や2年生だった。なぜなら、ゼミに参

放課後八限目ラヂオの背景と目的

プロジェクト背景

背景 1. 大学のコロナ対応

新型コロナウイルス感染拡大に伴い以下の要請が早稲田大学より学生に対し出された。
2020年2月下旬、課外活動の一部を制限する要請と2019年度卒業式・大学院学位授与式および2020年度入学式の中止の発表、4月2日、春学期の授業開始日が5月11日まで繰り下げられ、授業は全面オンラインで実施されることが決定。なお課外活動の自粛要請、関連施設関連施設の利用停止等は、8月1日まで継続された。これにより、友人との外出、食事や、ライブハウス等の密着空間で娯楽に興じる、キャンパスへの入構、新歓コンパなど例年であれば行われていた活動を行うことは困難になった。
5月25日に緊急事態宣言が解除後、東京都の小中学校、高校では分散登校の対策を講じるなどで対面授業を再開したが、早稲田大学には国内外問わず様々な場所に学生がいることを理由に春学期終了まで、全面オンライン授業が継続された。秋学期になった現在も、ゼミなどの一部授業を除き、原則オンラインにて授業が行われている。

背景 2. 授業形態の変化による授業内のコミュニケーション量の変化

オンラインによる授業形態はこれまでとは大きく異なるものだった。教室で教授や他の学生と顔を見合わせながら行う授業ではなく、自宅で、zoom や moodle を用いながら各自がPC画面を通して受講することになった。授業の方法は主に①事前に教授により収録された講義を一定期間の間に見るオンデマンド型の授業、②リアルタイムでzoomなどを用いて受けるオンライン型授業である。オンデマンド型の授業は、いつでも自分の好きなタイミングで視聴でき、一人で完結する。そのため教授や他の受講生と接する機会はほとんどなかった。オンライン型の授業でも受講生の多い授業は学生はカメラオフ、マイクオフの状態に参加しており、学生同士が話す機会は少なかった。さらに、zoomでの授業は、授業開始と同時にオンライン授業の教室が開き、授業終了後には教授によってその部屋は閉じられてしまい、授業の前後に学生同士が話せる余白の時間は存在しなかった。

背景 3. 雑談する機会の減少

そもそも大学は偶発的なコミュニケーションが多発する場所でもあった。
これまで、大学には教室や廊下、サークルで利用する施設など、空間や時間を共有できるスペースが多く存在した。そこでは学生同士が課題を一緒に行ったり、昼食をとる行為を通じて互いの近況について話すといったコミュニケーションが発生していた。しかし、人と人が直接会うこと、物理的な空間を不特定多数の人で共有することが制限される中では、友人との外出、娯楽に興じること、食事や、キャンパスへの入構、新歓コンパなど例年であれば行われていた活動はすべてオンライン上で行われた。
学生同士が偶然出会い、他愛のない雑談をする機会は減少し、コミュニケーションは、決められた時間に決められた人と与えられたオンライン上で行うだけだった。さらに、コミュニケーションの方法も限定的であった。
授業、サークルなどで人とコミュニケーションを取る場合には、zoom等のアプリケーションを使用した画面越しでのやり取りが主だった。それは、長時間にわたり自分と相手の顔を直視しなければならず、対面で人と接する時とは別の緊張感が常にあったと思う。

プロジェクトの目的、コンセプト

オンラインでありながら、インタラクティブでインフォーマルなコミュニケーションを行える場所が必要なのではないかという課題を背景に、〈自由に誰でも出入りでき、偶発的なコミュニケーションが発生する場〉〈パーソナルなことを話せる場〉〈授業とは違う環境を持つ場〉の3つの目的を満たす場を作る試みが始まった。

1. 自由に誰でも出入りでき、偶発的なコミュニケーションが発生する場

大学生活がオンライン化したことによる問題の一つは、学生がいつでも参加できる場、不特定多数の人と時間をともにできる場の減少だ。
zoom上では、授業やミーティングの主催者が定めた時間に、指定された部屋でしか人と会うことはできない。そして、そこにはzoomのリンクを知る人しか参加できない。話題が決まっている、参加する人も決まっているという面でzoomはとても計画的な場所であり、偶発的な出会いは起こりにくい。大学は学びの場であると同時に他者と出会い、関係を築く場所でもあった。しかし、授業や課外活動のオンライン移行に伴い、偶発的に他者と関わりを持つ場が失われ、そこで発生していたコミュニケーションの機会も減少した。そこで、オンライン上でも、いつでも出入りができて人の気配や声に出会える場所が必要ではないかと考えた。

2. パーソナルなことを話せる場

物理的な場所を共有している場合、人と人の間には距離があった。私たちはその距離によって、話す対象との関係性を調整しどの会話を誰と行うかを自由に選択し、パーソナルなことを話していた。
しかし、zoom上では基本的に全ての参加者が一つの話題に参加することになる。特に授業という環境では、話題の方向性が定められていることもあり、話題や会話の対象の選択肢はより狭まっていた。その状況に息苦しさを感じ、誰もが自由に、自分の身近に起きたことを話せる場を作りたい考えた。

3. 教室のオルタナティブになる場

オンライン授業が常態化の中では、学生は長時間画面に拘束された生活を送ることになり、それは大学に通っている時とは別の緊張感や疲労をもたらした。音声メディアは、聴覚のみで情報を得ることができ、身体を置く環境に対する制限が少なく、生活の様々な場面で楽しむことができる。オンライン授業とは異なる媒体を用いて、授業中とは別の環境を学生の選択肢として作ることも目的の一つだった。

音声メディアを利用した理由

- ① zoomのように参加のために特定のリンクが必要ではなく、インターネット上にある音声、お便りには時間、場所を問わず誰でもアクセスできる。
 - ② 話題と相手を選びながら、自由にお便りを通して各個人が自分の声を配信者に届けられる。
 - ③ 他のリスナーが出したお便りやパーソナリティのお喋りを通して様々な他者に触れる機会を設けられる。
 - ④ 音声のみで楽しめるメディアであり、日常生活の中でなにかしながら参加できる。
- 配信先：Spotify(<https://open.spotify.com/show/5yPXM56Nd7JNQ8mvgrgJOy>)
Youtube(<https://www.youtube.com/channel/UCFyckCEIkBYAQhnJnMyXnQj>) (2020年12月19日)

図1 放課後八限目ラヂオの背景と目的

加していない大学1年生、2年生は他学年よりも対面授業の機会が少なく、学生同士の繋がりがより希薄であると考えられていたためだ。

インターネット上にあるコミュニティに接続してもらうには、SNSや影響力のあるWebメディアといった、インターネット上で多くの人が交差する場に情報を掲載し、不特定多数の人の目に止まる状態を作る必要があった。もしくは、人々が行き交うリアルな空間においてポスターなどを用いたより積極的な情報発信が必要だっただろう。

ポスター掲示やWeb媒体への掲載に取り組んだが、大学に来る学生が少ない状況では、学内で番組について認知してもらえる機会は少なく、また、プロジェクト運営チームの広報活動が手薄だったこともあり、番組を多くの大学1年生や2年生に届けられたとは言えない。現段階では、放課後八限目ラヂオは参加はしやすいが見つけにくい場であると思う。

2-1-2. 運営面から考えて

本プロジェクトは運営面でも、誰もが、気軽に参加できる場を目指した。当初は中村、富澤で始めたが、配信を続けるにつれ他のゼミ生や、学部の催し物で出会った社会科学部の1年生も運営に参加してくれた。この番組が一つの参加しやすいコミュニティとして機能していたといえるだろう。

2-1-3. 偶発的な出会いについて

オンライン授業が抱える偶発的な出会いが起こりにくいという問題をこの番組内では多少解消できたのではないかな。毎週の配信を通して、パーソナリティ同士、パーソナリティとリスナー、“お便り”を通したリスナー同士の関係が生まれた。ここでの出会いは前から約束されたものでも、事前に構築されていたものでもなく、毎週番組に様々な経緯で集まった人々が作り上げた偶発的な出会いといえるのではないかな。

2-2. 番組を通じてパーソナルな事を話す場所は作れたのか。またそれはどのような過程を経て確立したのか。

2-2-1. お便りの出し方から考えて

リスナーから他愛のない話を引き出せるかは、お便り募集にどのツールを使用するかに関係していた。本番組では、Google フォーム、インスタグラムのストーリー機能、電子メールの順で使用された。

Google フォームは、匿名性が保たれる、字数制限がない、SNS から簡単アクセスできる、この3点を満たしているため最も使用率が高かったと考えられる。

インスタグラムは学生の利用率は高いが、アカウント名から送り主が分かること、字数

制限があること、投稿が24時間しか表示されないことから、簡単に回答できるお便り以外には使用されにくかった。

既存のラジオ（リスナーとは無縁の芸能人などがやっているマスメディアとしてのラジオ）と異なり、本番組のリスナーはパーソナリティの知人であることが多い。この関係性の中では匿名性が保たれない場所で、個人的な出来事は送りづらいという声が複数寄せられた。このことから、匿名性が保たれることとお便りの送りやすさには関連があることがうかがえる。

電子メールはそもそも学生の使用頻度が低いツールであり、あまり使用されなかった。

2-2-2. 他愛のない話を誘発するようなテーマ設定

他愛のない話をするために、番組ではトークテーマの設定されたお便りとリスナーが自由にテーマ設定できる“ふつおた”の2種類を募集した。

お便りを募集すると、自由に書くことができる“ふつおた”よりも、トークテーマが設定してあるお便りの方が多く回答が得られた。また、テーマのあるお便りでも、お悩みや夏休みの思い出などリスナーが個人的な経験を語ることができるテーマ、状況が限定されているテーマは回答が得られやすかった。一方、うれしかったこと、懺悔したいことなど漠然としたテーマだと回答率は低かった。パーソナリティも収録中、自身のこと、自分の経験について話す傾向があった。これを踏まえて、トークテーマ設定の際は、思い出や自分の事を書くことができるテーマを選択した。

メインのお便りはトークテーマが設定された方であったが、番組をいつでも、日常の些細な出来事を気軽に話せる場として機能させたかったため、テーマのない“ふつおた”は毎週募集した。10月半ばからはGoogleフォーム上にパーソナリティからリスナーに向けた“ふつおた”を掲載した。相互にお便りを出し合う関係性を構築すること、パーソナリティから“ふつおた”を出すことで、どれほど些細なことであっても書いて構わない場だと示したかったからだ。

このようにして他愛のない話が引き出せるよう、番組をデザインした。

配信を重ね、お便りテーマやお便り募集法を改善していく中で、リスナーからのお便りの量、内容ともに充実していった。放送を重ねることで、番組全体のカラーが定まり、パーソナリティだけでなくリスナー自身もこの番組の雰囲気慣れてきたためだと推測できる。

リスナーの反応をうかがいながらお便り募集の方法、テーマに変更を加えていった運営と、パーソナリティの喋りを聴き、この番組にどのように参加していくか見つけていったリスナーの相互関係により、少しずつ番組が“他愛のない話をする場”に近づいていったと感じる。

2-3. 授業と異なる環境を作れたか。

番組は、教室存在していたような教授と学生、情報を与える側と聞く側という明確な力関係は存在しない場所であった。それは匿名のリスナーと、声と名前、大学生であることしか公表されていないパーソナリティ間のやり取りを配信する音声メディア上だったから、そしてお便り中心の番組進行だったからだろう。番組では年齢、性別といった個々人の情報が省かれたもの同士、きわめてフラットな関係の上で双方向コミュニケーションが成り立っていたと感じる。この側面においては、教室のオルタナティブとなる場を作れたと思う。

おわりに

生活が一変し、他者とのコミュニケーションが制限された中での、突然の思いつきがこのプロジェクトの始まりだった。見切り発車で始めた番組ではあったが、徐々に運営メンバー、リスナーが増え、誰かの声を耳にすることができる場が半年かけて作られていったと感じる。そして、多少ではあるが、社会情勢が大きく変化する中でも、個々の人々が日常で抱いた些細な思いや考えを記録できたことはこの場所が果たせたことの一つだと思う。(中村)

回数を重ねるにつれて、放課後八限目ラヂオがどういう場所なのか、どういう場所でありたいのかが明確になってきたような気がする。情報だらけで目まぐるしいこの時代に、ホッと一息つけるようなそれでいて新しい発見だったり、新鮮な感覚だったりを味わえる場所があること、そこに関われていることをうれしく思う。素敵な30分を共有できるこの場所をより多くの人に訪れてもらいたいという想いが強くなるばかりだ。(栗山)

このプロジェクトを振り返ってまず思うことは、私自身が非常に番組を楽しんでいたということだ。番組を通して人と出会うことに喜びを感じ、お便りからその人の日常を覗くのは毎回興味深く、私自身学ぶことも多かった。もちろん広報面や内容などこれからもっと精力的に改革していきたい部分はあるが、なによりも形として残せたことがこの番組の成功の一つであると思う。この番組は毎週リスナーからのお便りによって支えられていた。番組に遊びに来てくれた全ての人に心からの感謝を伝えたい。(富澤)



図 2 プロジェクトの進行詳細

